現代日本における若者の異性交際関係の多様性
ー「恋愛」の曖昧さの視点からー

チョウ　シンヨウ（お茶の水女子大学）

恋愛結婚が主流となったことによって、社会学の領域で若者の恋愛問題への関心が高まっている。一方、現代日本において、「恋愛」の定義が極めて曖昧となり、2000 年代以降、更に 2010 年代に入ってからは、「恋愛」の機能が分解されつつあり、異性交際関係は様々な形で展開されている（高橋 2021）。現代的恋愛の特徴は、「強い恋愛、代替不可能な恋愛や通過儀礼としての恋愛から、恋愛とそうでない関係との境界が曖昧な恋愛へ」（羽渕 2008）と指摘されてきた。例えば、「友たち以上恋人未満」や「セックスフレンド」、「添い寝フレンド」や「付き合うことに至って独占の契約を結ぶカップル」（大森 2014）など、若者たちの間の親密性は様々なかたちが存在している。つまり、「恋愛」という概念それ自体が、自明のものとして捉えられなくなり、以前「恋愛」としてまとめられていたものは、その機能がさまざまな関係性に外部化され、現代日本の若者の異性交際関係は、「恋愛」という用語だけでは説明できない「多様性」を特徴としている。しかし、「恋愛」や「結婚」に関する日本の先行研究は、依然として、「恋愛」を自明な概念として用いてしまう傾向があり、異性交際関係の多様性の全体像を把握できる研究が不足している。

そこで、本発表の目的は、「恋愛」定義の曖昧化背景を踏まえ、現代日本における若者の異性交際関係の多様性現象は、一体どのように展開されているのか、それぞれの交際関係はどのような特徴を持つのかを統計的に解明し、その上、交際関係の多様性の背後に、どのような規範意識が作用しているのかを明らかにすることである。研究方法として、首都圏在住の 18 歳から 25 歳の異性愛者の未婚日本人 500 人（男女各 250 人）を対象としたアンケート調査を用いる。

まず、現代日本若者の異性交際関係は 4 つのパターンに沿って多様性を表していることを明らかになった（図 1）。その中、経験率が最も低い「付き合わずに性行為する関係」（パターン②）でも、経験者数は 20%を上回り、他のそれぞれの交際関係パターンでは、半数未満の経験率があることを検証できた。そのため、異性交際関係の多様性が、現状として実在していると言えるだろう。また、交際関係パターンにかかわらず、いずれかのパターンを経験したことがある人は、半数以上を占めているため、問題視されている若者の「恋愛」離れという現象は、どの程度まで実在しているのかを、再検討する余地があるだろう。

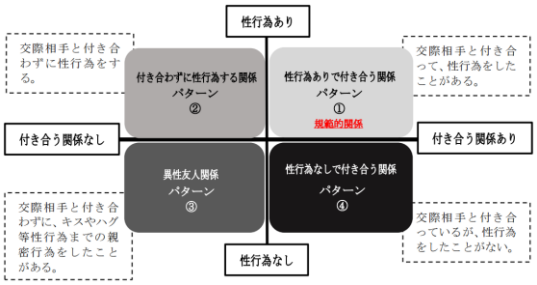

図 1. 異性交際関係モデル

更に、若者の異性交際関係は、多様な形で展開されているにもかかわらず、「相手と付き合っている間に性行為する関係」は、最も望ましい関係として、規範化・価値化されていることがわかった。つまり、「付き合う」という契約と「性行為」、および両者の順序性が重要であるという意識が存在している。

以上によって、2010 年代からの現状だと論じられた、異性との交際は多様な形で展開されていると同時に、特定の規範的な関係への期待が強く存在している現象（高橋 2021）を統計的に検証できた。実際、こうした規範化・価値化された交際関係は、まさに異性愛主義的な結婚における伴侶性の理想と大きく重なっていると考えられる。つまり、男女からなる、性的、ロマンティック的な繋がりを持つ排他的な関係という、結婚におけるパートナー関係の理想は、「付き合う関係」を規範化することによって、元々結婚から分離した異性交際関係の内部に、再び持ち込まれている。その中、セクシュアリティを通じて、男女が信頼関係を築くという伝統的構造が維持されていると考えられる。

（キーワード：異性交際関係、恋愛、性）

参考文献　▼高橋幸,永田夏来.2021『恋愛の現在:変わりゆく親密さのかたち』.現代思想 49(10). ▼大森美佐.2014「若者にとって『恋愛』とは何か」.家族研究年報 39(0),109-127. ▼羽渕一代.2008「青少年の恋愛アノミー」.岩田考,羽渕一代,菊池裕生.『若者たちのコミュニケーション・サバイバル』.恒星社,77-90.